慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岡田泰男著 フロンティアと開拓者 : アメリカ西漸運動の研究
Sub Title	
Author	大森, 雄太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1996
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.88, No.4 (1996. 1) ,p.632(130)- 635(133)
JaLC DOI	10.14991/001.19960101-0130
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19960101-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」88巻4号（1996年1月）

書評

岡田泰男　著

『フロンティアと開拓者
——アメリカ西漸運動の研究——』

東京大学出版会，1994年9月，316＋vi頁

本書には二つの目立った外見的特徴があり，それらがそのまま本書の内容的価値の一端を示しているといえる。第一に，本文はもとより註においても，言及される日本語文献が極端に少ないことである。実際，フロンティア＝西漸運動について見れば，日本語の出版物はあるものの，そのほとんどが導入（概説）書であったり，ターナーとその批判研究の紹介であって，日本においては意外にも専門研究の手薄な分野である。特に本書のバックボーンをなす西部の土地の問題に限定するならば，『アメリカ公有地制度の研究』（陽樹社，1973年）以来，ほとんど岡田氏の独壇場といってよい。しかも，今回は対象を西部の土地の問題から，西漸運動全体に広げたのであるが，この点，東部農村や西方移住の実態を描いて見せたことは，他ではなされていない独自の成果である。「もう三十年以上，フロンティアで暮らしてきた」著者が，いまだに「人里離れた開墾地の住民の気持ち」（あとがき）を持ち続けているのも当然のように思われる。

しかし，本書の価値は研究の稀少性にのみあるのではない。一見して気付く第二の特徴は，提示されている統計数値等の表のほとんどが，岡田氏自身の手になるものであることである。日本におけるアメリカの経済史や社会史の研究状況においては，本文においてあたかも研究者独自の主張を展開しているかのごとき印象を与えながらも，根拠となる統計数値は，いわゆるアメリカの「先行研究」からの引用が多く，その意味で残念ながら三次的研究といわざるをえないものが多い。これに対して，本書で用いられている数値は，農民運動を扱った第九章を除いて，各種センサスや未公刊マニュスクリプトから著者自身が起こしたものであって，その実証性へのこだわりは高く評価されるべきである。

さて，評者はこの分野について全くの門外漢であり，素人ならではの誤解もあるかもしれないが，以下に各章の要点をまとめて本書を紹介しておこう。第1章と第2章は全体にとって概論的な部分となっている。第1章「自由な土地の夢」では，西漸運動の原動力となった連邦政府の公有地政策がもたらした二つの効果が検討される。西部開拓＝農地の拡大という意味での経済発展効果と，開拓民への土地分配による所得再配分＝アメリカ社会の民主化の二つの効果である。著者は，全体としてみれば，西部に小規模独立自営農民の社会を創出するという民主化を伴う経済発展と，結果として大土地所有を生み出した民主化を伴わない経済発展の二つの方向が共存していたと整理する。第2章「森の中の民主主義」では，「フロンティアとは新しいコミュニティーが形成される場所である」と定義づけた上で，旧北西部型のフロンティア・コミュニティーの形成原理を検討し，それを民主的で平等な自発的結合にあるとして，フロンティアにターナー的民主社会が成立していたと主張する。

第3章から第6章までは東部農村を考察し，かつ西部移住の実際を描いている。第3章「東部から西部へ」では西漸運動を東部農村の側から見るために，ニューヨーク州がとり挙げられる。従来は東部農村が西部の農業生産力に敗れた結果として，西部への移住者の供給源となったとされてきた。著者はこれに異議をとなえ，むしろ東部内部での都市向けの新しい農業の展開によって，そのための資本を持たない農民が，西部への移住をよぎなくされたとし，西部の存在という外的要因よりは，むしろ東部農業の変化という内的要因に人口流出の原因をみる。同時に，東部内部での近距

離の人口移動が重視され，西漸運動はこうした無数の近距離移住の集積からなっているのであって，フロンティアとは，その「大きなうねりの波頭にすぎなかった」ことが示される。

第4章「勘定帳の中の世界」は，ニューヨークの一中流農民の残した勘定帳と州センサスを組み合わせて分析し，西部農業との競争に敗れて苦境に立たされたという通説的な東部農村ではなく，適度な資産があればそれなりに満足のいく生活をおくることのできる東部農村像を提示している。この農民の勘定帳に現れる取り引き相手の変化をたどることによって，半世紀にわたる一農民の生活を生き生きと描いて見せる著者の手腕は出色であって，無機質な史料からでも生きた世界を再現できることを示す模範のようなできばえである。

第5章「寒村での思索」は，ヴァモントの一零細農民の残した日記を材料に，最近のリヴィジョニスツによるジャクソン期の庶民像に再修正を加えようとするものである。リヴィジョニスツたちが受動的で活気のない「いささか気がめいる」東部農民像を提示しているのに対して，本書においては，経済が停滞し人口が流出するヴァモントの一寒村の農民が，にもかかわらず自己をとりまく政治的・経済的世界に対して鋭く批判的な分析をおこない，世界に対して積極的にコミットしてゆく存在として描かれている。第6章「オレゴンへの道」は，前章の主人公たるヴァモントの農民がイリノイに移住し，さらに極西部オレゴンに移住していった大陸横断の足跡を，彼の日記を手がかりにたどってゆき，西部移住の実際を再現してみせる。イリノイまでの移動では，ヴァモントでは食べてゆけないというプッシュ要因が強かったが，そこからオレゴンへの移住では，さらに大きな成功を求めるプル要因が強調されている。

第7章から第9章までは，経済史的視点から西部の諸問題を扱っている。第7章「開拓農地の贈り物」では，土地なき者に土地を分配するというジェファスン的社会哲学に基づいてアメリカ社会を民主化し，同時に開拓促進によってアメリカの経済発展をねらったホームステッド法の二つの目的が，どの程度達成されたかを，ネブラスカのある郡をとおして見てゆこうとする。著者はネブラスカに関する限り，ホームステッド法には所得再配分効果と同時に経済発展効果もあったことを見出す。第8章「荒野を拓く者」は，カンザスを例に西部開拓の原動力を，専門業者による大規模投機とは区別される，開拓農民自身による小規模土地投機に求めるジェイムズ・メイランの説を検討する。著者は開拓農民の投機が専門業者の投機とは性格を異にすることを指摘し，かつメイランのように西漸運動のすべてを土地投機に求めることに対しては自重を促しつつも，西漸運動の大きな要因として開拓民による土地投機の重要性を指摘する。第9章「鉄道と商人への怒り」は中西部の農民運動をとり挙げている。この分野では，主として計量経済史的手法による研究が，農民の経済的不満には正当性があったとする旧説をくつがえしてきたが，著者は計量経済史の成果を紹介しつつ，修正の再修正を試み，農民の不満には十分な根拠があったとする。同時に，これまでの研究が中西部農民を一個の利害を共有するものとみなしてきたのに対して，著者は農民運動内部に利害の対立を見て，外部に対する抵抗と同時に内部における支配権をめぐる闘争という二重の対立を見る視点を提唱している。

最後の二章は少し違った問題を扱っている。第10章「女王陛下の土地」では，外見上は類似しているにもかかわらず，異なった目的と効果を持ったアメリカとカナダのホームステッド法が比較検討される。カナダの場合，独立自営農民の創出というジェファスン的社会哲学が不在であり，カナダ西部を確保するための開拓促進のみに目的があったにもかかわらず，開拓民に有利な法となったことや，公有地がアメリカでは共和国の土地であったのに対して，カナダではイギリス国王の土地であって，異なった性格のものであったことが強調されている。第11章「二十世紀のフロンティア」は，フロンティア終了後の，地域としての西

部史の諸問題がとり挙げられている。東部による西部の植民地化，水利権，環境史の立場からの自然保護，西部における連邦権力の拡大，インディアンその他西部マイノリティ，都市と農村の対立など，２０世紀西部史の諸問題が整理され，提起されている。

以上，各章の要点を整理してきたが，本書は明晰な文体で書かれているにもかかわらず，全体像の明解な研究ではない。その技術的な理由と評者がみなす事柄については後述するとして，最大の理由は，岡田氏が経済史家にはめずらしく，「歴史の普遍性よりは特殊」にひかれ（序章），モデル先行型の歴史を意識的に避けようとしているところにあると思われる。問題はターナー＝フロンティア学説である。著者はターナーはもちろんのこと，素朴なターナー学説を切りくずしてきたリヴィジョニスツの研究成果を参考としつつも，彼らの描く歴史像に先験的に支配されてはならないという意識的な姿勢を持ち，実証研究を積み重ねようとしているからこそ，読みにくい研究になったと思われる。結果として提示されたものは，あえていうならば，リヴィジョニスツに対するリヴィジョニストの立場であって，最近の精緻な研究成果をふまえつつも，ターナー学説にある種の親近性を持ち，大枠ではターナーの中で仕事をしている（291頁）という微妙な立場を取ることになる。

本書の主題は，19世紀アメリカ史におけるフロンティアの意義であり，とりわけフロンティアの存在がアメリカ社会の民主化や経済発展に果たした効果である。この点著者は，連邦政府の公有地政策が，民主化を伴う経済発展と同時に民主化を伴わない経済発展を促進したという。そしてまた，西部を一元的にはとらえず，工業化や都市化をも視野にいれ，西部内部の社会グループ間の対立関係を指摘している。これらはいずれも，精緻な研究によって複雑化した西部像を著者が十分にふまえていることを示している。

しかし他方で著者は，例えば，従来は否定的に見られがちであったホームステッド法の効果について，同法が経済発展と同時に開拓小農民への所得再配分の効果を持った事例をネブラスカから摘出し，地域を限定するならば，フロンティアがアメリカ社会を民主化する意義をもったと主張している。この点，フロンティアにおけるコミュニティーの形成原理の中にアメリカ市民意識の源泉を見たり，自律的で世界に積極的にコミットしてゆくジャクソン期農民像を描いて見せるなどのポイントは，ある種ターナー的であって，著者独自の主張をなしている。

本書の中で最もオリジナリティが強く，高く評価されるべき部分は，東部農村内部と西部移住を扱った第３章から第６章にかけての，未公刊マニュスクリプトを用いたケース・スタディである。取り出されたケースのうち，中流農民の場合はそもそも移住のプッシュ要因が不在であったのに対して，西部への段階的移住をよぎなくされた小農民の場合では，にもかかわらず西部からの経済的のみならず精神的なプル要因が強調されている。著者も自信を持って「ここにかなりの比重をおいた」（序論）と述べているように，この部分の実証の質の高さは特筆すべきである。同時に，従来見過されてきた東部農村内部の分析を重視したことは，西漸運動の説明に立体感を与え，本書の価値をかなり高めているといえる。

本書は全体像のつかみにくい研究であるが，それは技術的には，既発表論文を集めて一冊の研究書とする際の宿命にも理由があるように思われる。個々の章が全体の歴史像にとってどういう意味を持つのかを理解する作業が読者にゆだねられていて，著者の側からの親切な手引きに欠けるところがある。この点，論文での「本稿」を「本章」とあらためたり，簡略な序論を追加するだけではあまりにも不親切であって，序論でもっと入念に全体像を説明するとか，各章の終わりや次章の初めに，章と章をつなぐブリッジをかけるなどの工夫があってもよかったのではないか。

また，内容上は，重要なポイントが全体を通し

て一貫して維持されなかったり，提示されるだけで放置されることがあるのも気になる点である。例えば，第1章と第2章で概論的に示される西漸運動の二類型（大土地所有の支配的な南西部型と小農中心の北西部型）が，その後の論考においては利用されていない。著者の関心が北西部に集中するのはわかるとしても，この点が，例えば土地投機の問題を扱った第8章で再整理されてもよいのではないか。さらに，フロンティア研究は本来比較史を強く意識する分野であり，アメリカ西部内部の比較史的類型化と同時に，フロンティアを持つ他国との比較研究も重要である。この点，民主的な共和国の公有地の土地処分とは対照的な，King's dominion の土地処分であったカナダのホームステッド法を検討した第10章で，にもかかわらず，ホームステッドで処分された土地が，割合上はカナダの方がアメリカの三倍に達したという「皮肉な」結果は，指摘されるだけで終わっている。このことがアメリカのフロンティア研究にとっていかなる意義をもつのかが論考されないのも奇妙な感じがする。

著者の関心が先行した結果として，読者に対して不親切なところがあるにせよ，本書が，岡田氏の開拓者的な知的好奇心と，長年にわたる着実な研究成果に裏づけられた卓越した書物であることにかわりはない。本書は，西部史のみならずアメリカ史を勉強する人々にとって，必読書の一冊として定着することになるであろう。

大　森　雄太郎
（文学部助教授）